

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年8月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士後期課程・3年

氏 名 本 郷 峻

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第25回国際霊長類学会大会		
発表題目	(和文) マンドリルの行列から社会システムを読み解く (英文) PROGRESSION OF MANDRILLS: IMPLICATIONS FOR THEIR SOCIAL SYSTEM		
開催場所	ベトナム社会主義共和国、ハノイ、メリア・ホテル		
渡航期間	平成26年 8月10日 ~ 平成26年 8月25日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円	
	使用した助成金額	150,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	往復航空券・・・22,000円	
		大学ー関西空港往復交通費・・・3,000円	
		学会参加登録料・・・25,000円	
		宿泊料・・・24,000円	
		現地国内交通費・・・18,000円	
その他現地滞在費・・・60,000円			
	計 152,000円 (うち150,000円を財団助成より支出)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団の助成のおかげで、学会参加・発表が可能になり、大変感謝している。採択後の手続きも明朗でスムーズだった。助成額に関しても、少なくとも東南アジア国の区分においては適切であると考えている。		

成果の概要／本郷峻（理学研究科・生物科学専攻）

京都大学教育研究振興財団より助成を受け、8月11日から16日の6日間にかけてベトナム・ハノイにて開催された、第25回国際霊長類学会大会に参加した。本大会には、アメリカ合衆国・イギリス・フランス・スイス・日本・中国・韓国・マレーシア・タイ・ベトナム・インドネシア・コンゴ民主共和国・ガボン・メキシコ・ブラジルなど30を超える国から約600名の研究者が参加した。大会における使用言語は英語であった。会場は、ハノイの中心部に位置するメリア・ホテルの2フロアにわたって行われた。初日のOpening receptionでは、私がフィールド調査を行っているガボン共和国のEbang Ella Ghislain氏や、コンゴ民主共和国の類人猿研究者Augustin Basabose博士などと再会し、近況を報告しあったり、彼らから私の面識のない研究者を紹介していただいたりすることができた。

私は、13日午前中の「Social Dynamics（社会動態）」のセッションで、口頭講演を行い、霊長類の一種であるマンドリル（*Mandrillus sphinx*）の社会システムに関する自身の研究について、動画を交えながら発表した。

本研究は、熱帯雨林という生息環境のため、野生下での観察が困難なマンドリルの社会システムを、道渡りなど、開けた場所での行列に着目して明らかにした研究である(Hongo 2014)。マンドリルを含むヒヒ亜族（Papionina）という分類群の社会システムは種によって異なり、「単雄ハーレムを単位とした重層社会」と「内部単位を持たない複雄複雌の単層社会」の大きく二つに分類される。これまで、ヒヒ亜族の社会多様性とその進化については、サバンナや砂漠など比較的観察が容易なところに棲息するゲラダ、マントヒヒ、サバンナヒヒ類での研究が中心であり、マンドリルの社会についてはいくつかの矛盾する報告があるのみで、十分な研究がなされていない。多様なヒヒ亜族の社会進化とその環境要因の解明のためには、熱帯雨林に生息するマンドリルの社会を明らかにすることが不可欠である。本研究では、道渡りなど開けた場所をマンドリルの群れが通過する際の、行列の性年齢構成・行列順序・行動などを分析し、マンドリルの社会が重層社会と単層社会のどちらと共通する特徴を持つかを検証した。分析の結果、マンドリルの群れは時に400個体以上にもなり、なおかつその中にいるオトナオスは非常に少ないことがわかった。これは先行研究と一致する結果であり、上の特徴がマンドリルの種としての共通した特徴であることを示唆する。さらに、行列のパターン、個体の順序、行列移動中の行動とも、重層社会のマントヒヒやゲラダと類似する特徴を示さず、単層社会のサバンナヒヒ類と類似する特徴を持っていた。これら結果より、マンドリルはサバンナヒヒ類のような単層社会を持つことが示唆された。ただし、マンドリルではサバンナヒヒ類と異なり、頻繁なサブグループングが観察されており、離合集散のパターンに関してはさらなる研究が必要である。

私の発表中、会場には約70名の視聴者がおり、マンドリルの400頭を超える大集団の社会について、多くの研究者に印象深い発表をできたと考える。15分の講演時間のうち12分で発表を終え、残りの時間で2名の研究者より質問をいただくことができた。2つともなかなか厳しい質問で、かつ流暢な英語で少し戸惑ったが、なんとかきちんと応答できた。これらの質問やコメントは、今後のフィールドワークやデータ分析を進めていくうえで非常に参考になるも

のだった。マンドリルの研究者は世界的にも非常に少ないが、その中でもマンドリルの繁殖生態・生理学に関して15年以上研究しておられる Joanna Setchell 博士（英・デュラム大学、現国際霊長類学会 Vice-President of Research）や、群れの意思決定研究の専門家である Odile Petit 博士と彼女の学生であり研究仲間の Céline Bret 氏（ともに仏・ストラスブール大）が発表を聴いてくださり、発表後に情報・意見を交換したり激励の言葉をいただいたりすることができた。

学会中、他にも多くの刺激的な発表を聴くことができた。まず、私の研究内容と近いところでは、セネガルのギニアヒヒを研究するドイツの研究チームの発表が興味深かった。ギニアヒヒもこれまで社会システムの解明が遅れている種である。Julia Ficher 博士と Adeelia Goffe 氏（ともに独・霊長類センター）の発表からは、ギニアヒヒも重層社会をもちながら、その構造はマントヒヒなど他の重層社会のものとは異なるようであり、ヒヒ亜族のより多様な社会性が明らかになりつつあると強く感じた。Goffe 氏とはその後かなり長い間議論することができた。また、私の研究分野とは直接関係ないが、印象に残っているのはカニクイザルが石を使ってカキなどの貝類の殻を割って食べる行動の研究であった。カニクイザルはただ海辺の石を手当たり次第に取って貝を割るのでなく、叩き割る・こじ開けるなど用途によって適した形状の石を選んだり、より大きな石に打ち付けて形状を変化させたりして使用するなど、高い応用力を見せるようだ。ヒトに近い類人猿ではなく、マンドリルやニホンザルに近いオナガザル科のサルがこれほどに複雑な道具使用を見せることは驚きであり、今後の研究成果が楽しみであった。さらに、発表技術でも海外の研究者の発表を聴くことはよい参考になった。特に、Carel van Schaik 博士や Joanna Setchell 博士の発表スタイルやスライド作り方は、シンプルであってわかりやすく、今後の学会発表での参考にしたいと思う。

以上のように、本大会への参加によって、自身の研究を広く世界の研究者に広めることができただけでなく、様々な分野の研究者との情報交換をもち新たなつながりを作ることができた。非常に有意義な大会になったと考える。